大阪歯科大学付属病院における顎変形症患者の 臨床統計的観察

高橋一郎 橋本登 平木良隆
日野年二 川本達雄 木下善之介
久保諠修* 白数力也* 中嶋正博*
岡野博郎** 川添堯彬***

Clinical Study of Jaw Deformity Patients in Osaka Dental University Hospital

ICHIRO TAKAHASHI, NOBORU HASHIMOTO, YOSHITAKA HIRAKI,
TOSHIJI HINO, TATSUO KAWAMOTO, ZENNOSUKE KINOSHITA,
YOSHINOBU KUBO*, RIKIYA SHIRASU*, MASAHIRO NAKAJIMA*,
HAKURO OKANO** and TAKAYOSHI KAWAZOE***

Abstract: A clinical statistical study was carried out on surgical correction of jaw deformation in patients who visited Osaka Dental University.

- 1) The annual number of the new patients with jaw deformation slightly increased. A marked increase was observed after 1990.
- 2) The male/female ratio in the new patients was about 1 : 2.
- 3) The mean age at the time of initial consultation was 20.4 years for males and 20.3 years for females.
- 4) According to age groups, the number of patients aged 16-20 years accounted for 47.6% and that of patients aged 21-25 years for 30% of all patients.
- 5) Concerning area distribution in the new patients, Osaka prefecture accounted for the highest percentage (71%), followed in order by Hyogo, Nara, and Oyoto prefectures.
- 6) According to the type of jaw deformation, skeletal mandibular protrusion accounted for the highest percentage (84%).

Key words: statistical study (臨床統計), jaw deformity (顎変形症), first visit patients (初診時患者)

[Received Jun. 19, 1995]

大阪歯科大学歯科矯正学講座 (主任: 木下善之介教授)

* 大阪歯科大学口腔外科学第一講座 (主任: 白数力也教授)

** 大阪歯科大学口腔外科学第二講座 (主任: 岡野博郎教授)

*** 大阪歯科大学歯科補綴学第二講座 (主任: 川添堯彬教授)

Department of Orthodontics, Osaka Dental University (Chief: Prof. Zennosuke KINOSHITA)

* First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Osaka Dental University (Chief: Prof. Rikiya SHIRASU)

** Second Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Osaka Dental University (Chief: Prof. Hakuro OKANO)

*** Second Department of Prosthodontics, Osaka Dental University (Chief: Prof. Takayoshi KAWAZOE)

緒 言

顎骨の発育異常に起因する顎変形症の本邦での発生頻度は、比較的高いといわれている¹⁻³⁾。

顎変形症に対する治療は、矯正歯科、口腔外科、補綴科との共同治療⁴⁾により改良されるとともに、一般化している。さらに、1990年以降、高度先進医療の適用により外科的矯正治療の術前および術後矯正治療に対して健康保険が導入され、年々外科的矯正治療を希望する患者が増加している。

現状において、当大学付属病院における顎変形症患者の動態の把握は、地域医療への一層の貢献に必要なと思われる。

そこで、著者らは顎変形症患者の動態を把握する目的で、外科的矯正治療患者の初診時における動態について、臨床統計的に観察したので報告する。

調査対象および方法

調査対象は1980年から1992年までの12年間に、当大学付属病院に来院し、外科的矯正治療の適応と診断された患者である。それらの患者を以下の項目について調査検討した。

- 1) 年度別にみた初診患者数の推移
- 2) 年度別にみた初診患者の年齢層の変化
- 3) 年齢別にみた初診患者数
- 4) 初診患者居住地域分布
- 5) 診断名別症例数

結 果

1) 年度別にみた初診患者数の推移

Fig. 1は、年度別の患者数の推移である。患者数は年々増加の傾向があり、1991年を境に著しい増加が認められた。患者数の男女比は、1980年には約1:1であったものが、以後は約1:2で女性のほうが多く認められた。

2) 年度別にみた初診患者の年齢層の変化

Table 1は、年度別にみた患者の年齢層の変化で、16~20歳の年齢層において増加傾向が認められた。また、21~25歳の年齢層においては1989年以降増加が著しい。26歳以上の高年齢層は、1980~1990年までは年間の患者数の約10%前後であったが、1991年以降は約20%を占めている。

3) 年齢別にみた初診患者数

Fig. 2は、年齢別にみた初診患者数で、16歳~20歳の患者が最も多く(47.6%)、ついで21歳~25歳(30%)、26歳~30歳(10.2%)、11歳~15歳(7.5%)、30歳以上(2.8%)、そして10歳以下(2.4%)の順であった。全患者の平均年齢は20.3歳であった。男性の平均年齢は20.4歳であり、女性は20.3歳であった。

4) 初診患者居住地域分布

Fig. 3, Fig. 4は、地域別にみた患者数の分布で、大阪府が全体の71%を占め、ついで兵庫県10%、奈良県8%、京都府5%の順であった。大阪府下では、大阪市が最も多く37%を占め、堺市が

Fig. 1 Annual changes in number of patients

Table 1 Annual changes in number of patients with age group

year age	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92
0~15	4	4	3	7	5	4	3	4	3	3	5	1	4
16~20	3	14	10	13	18	17	10	23	25	28	22	30	29
21~25	1	4	2	9	10	14	14	9	5	13	20	28	23
26~	1	2	1	2	4	4	3	4	2	8	5	13	15

Fig. 2 Age distribution of patients

Fig. 3 Number of patients in The Kinki region

Fig. 4 Number of patients in Osaka prefecture

Fig. 5 In the type of malocclusion

8%で、八尾市、東大阪市、および枚方市が5%であった。

5) 診断名別症例数

Fig. 5は、12年間における診断名別症例数の割合で、骨格性下顎前突が最も多く84%であった。その他の症例では骨格性開咬7%、骨格性交差咬合5%、骨格性上顎前突3%、骨格性上下顎前突

1%であった。男女別でみると、男性は骨格性下顎前突が93%、骨格性開咬2%、骨格性交差咬合3%、骨格性上顎前突2%、骨格性上下顎前突0%であった。女性は、骨格性下顎前突が80%を占め、骨格性開咬9%、骨格性交差咬合6%、骨格性上顎前突3%、骨格性上下顎前突2%であった。

考 察

1) 年度別にみた初診患者数の推移

当病院における年度別顎変形症患者数は調査開始以来増加傾向を示している。そして、1991年には急激な患者数の増加傾向が認められた。これは、この時期に顎変形症患者の治療に対して健康保険が導入され、患者自身の治療費の負担が軽減されたことが深く関与していると思われる。

顎変形症患者を男女比でみると、他の多くの報告に見られるように男性に比べ、女性の増加傾向が著しい⁵⁻⁷⁾。

2) 年度別にみた初診患者の年齢層の変化

年度別にみた年齢層の変化は16歳～20歳が1981年以降増加傾向を示し、1987年以降は、一定数を維持している。これは、思春期特有の顔貌を一番気にする年齢層で、審美的な比重がかなり大きくなり、患者および両親共ども審美的な面を気づかうからではないと思われる。そのため、今後も一定数を維持して行くものと推測できる。

また21歳～25歳の年齢層が、1990年以降著しい増加傾向を示している。これは、健康保険の導入、および、審美的問題に加え、咀嚼などの機能面に対する患者自身における自発的な関心の表われでもあろう。

3) 年齢別にみた初診患者数

調査した12年間の年齢別にみた患者分布は16歳～20歳が最も多く全体の47.6%、21歳～25歳が30%を占め、両年齢層で77.6%を占めている。これに反して、低年齢層の患者数は少ない。このことは、外科的矯正治療後における成長発育の影響を考慮し、当病院では顎骨の成長終了後が手術適応時期と判断している結果と思われる。

男女別で比較すると女性は比較的低い年齢層で治療を希望している。このことは、女性のほうが低年齢層から審美的要求が強いことも考えられる。

4) 初診患者居住地域分布

来院患者の近畿県内の地域別分布では、当付属病院が所在する大阪府が大半を占めている。このことは他の多くの報告にみられるのと同様に通院時間が関係している^{8,9)}ものと思われる。

また、来院患者の最も多い大阪府をさらに、市

単位でみると、当病院から見て東、東南、南方面にある市からが多く、北方面の市からが非常に少ない。これは、高度先進医療の適用による外科的矯正治療の術前および術後矯正治療に対する健康保険指定病院が、関西では当病院と北部に位置する大阪大学歯学部付属病院のみの2カ所のためと思われる。また、交通の不便な地域からの来院も数多くみられる。これは各ターミナルに矯正専門医が存在し、そこからの紹介によるものと思われる。

5) 診断名別症例数

高度先進医療における健康保険の適用により、顎変形症に対する外科的矯正治療は年々増加傾向にある。また、その症状も雑多である。

当病院では、骨格性下顎前突症の割合は全体の84%で、男女の比率は約1:2であった。このことは他の多くの研究発表と類似している¹⁰⁾。

また、骨格性上下顎前突症は最も少ない頻度であり、この種の症例は女性だけに認められた。これは、日本人特有の上下唇の突出感の改善を矯正治療で行うには限界があり、過度の改善を望むために外科的矯正治療を行う傾向の表われと思われる。

結 語

著者らは顎変形症患者の外科的矯正治療について臨床統計的検討を行った。その結果、

1) 年度別にみた初診患者数は増加傾向を示した。また、1991年を境に患者数は急激な増加を示した。

2) 初診患者数の男女比は約1:2であった。

3) 男性の初診平均年齢は20.4歳、女性は20.3歳であった。

4) 年度別にみた初診患者数は16～20歳が全体の47.6%、21～25歳が30%を示した。

5) 初診患者居住地域分布は大阪府が全体の71%で、次いで兵庫県、奈良県、京都府であった。

6) 診断名別症例数は、骨格性下顎前突症患者がもっとも多く、全体の84%であった。

文 献

1) 滝本和男：顔面写真の研究（第1報）、日本人と米国

- 人の側貌の比較, 口腔病理学雑誌, 19 : 118-122, 1952.
- 2) 須佐美隆三, 他 : 下顎前突症患者の実態, 日本矯正歯科学会雑誌, 25 : 271-272, 1966.
- 3) 坪井研吾, 他 : 当科における顎矯正術施行例の臨床的検討, 日本口腔外科学会誌, 32 : 134-145, 1986.
- 4) 岡野博郎, 他 : 下顎前突症の治療の要点—特にプロジェクトチームによる両側下顎骨骨体部部分切除短縮術—, 歯界展望, 48 : 541-557, 1976.
- 5) 田中 毅, 他 : 東日本学園大学付属病院口腔外科における過去 7 年間の顎変形症の臨床統計的観察, 顎変形症研究会誌, 7 : 7-9, 1988.
- 6) 和久田哲夫, 他 : 当院における外科的矯正治療の臨床統計的観察, 日本顎変形症学会雑誌, 4 : 177-183, 1994.
- 7) 道見 登, 他 : 外科的矯正により治療した顎変形症 231 例の臨床統計的観察, 新潟歯学会雑誌, 18 : 11-21, 1988.
- 8) 前田公平, 他 : 松本歯科大学病院矯正科開設後 15 年間に来院した患者の実体調査—その 1 昭和 47 年～昭和 51 年—, 松本歯科学会雑誌, 14 : 154-161, 1988.
- 9) 水本恭史, 他 : 松本歯科大学病院矯正科開設後 15 年間に来院した患者の実体調査—その 2 昭和 52～昭和 56 年—, 松本歯科学会雑誌, 14 : 339-346, 1988.
- 10) 飯塚忠彦 : 顎変形症の外科的治療に関する研究, 口腔科学会雑誌, 32 : 696-722, 1983.